

日本災害情報学会「デジタル放送研究会'4」活動報告 (研究会幹事 天野 篤)

検証 “東日本大震災” 命を救う情報をどう伝えたか ～地震発生から1時間～

藤吉洋一郎代表

(公財)放送文化基金 研究報告会 「東日本大震災とメディア」 委託研究①

開催日：2012年3月2日 会場：海運クラブホール

1. はじめに

東北地方太平洋沖地震が発生した2011年3月11日14時46分18秒のおよそ30分後、三陸の沿岸部に10m前後に達する大津波が押し寄せた。その後の30分には、大津波の到達範囲は宮城県を経て、福島県にまで拡大していった。第4次デジタル放送研究会では、(公財)放送文化基金の研究助成・委託を受け、この震災の初動期において「命を救う情報はどうなっていたのか」に焦点をあて、放送などがどのように防災・減災に貢献することができたかを明らかにし、今後役立つ改善策を探ろうとしている。

17年前の阪神・淡路大震災では、地震発生から最初の1時間というもの、メディアは神戸など震源近くの被災状況をなかなか把握することができず、周辺の比較的軽微な被害情報ばかりを伝えることになって、大きな反省を強いられた。今回の東日本大震災では、テレビ局が配置した海岸のロボットカメラやヘリコプターによる上空からの生中継映像によって、大津波による被災状況は非常に早い段階から全国に逐一放送された。この点では、阪神・淡路大震災の経験は生かされ、目覚ましいまでの進歩をとげたといえる。

しかし、テレビやラジオが伝えた情報が、2万人近くの犠牲者の命を救うことにはならなかったのはどうしてだろうか？情報の伝え方に何か問題はなかっただろうか？停電した被災地域でも受信できたメディアという意味で、ここではNHKラジオの発生から1時間の放送記録を見直してみた。

2. 緊急地震速報と最初の津波警報(14時49分)

災害放送は、14時46分51秒、国会中継を中断して緊急地震速報が出たことを伝えるところから始まる(画面①)。これは予め録音されていた音声の流れのだが、47分49秒からはラジオスタジオに入ったアナウンサーの生の音声に変わる。さらに48分19秒からはテレビの音声をラジオにも流す緊急放送に入ったため、声はテレビスタジオからのアナウンスに変わる。緊急地震速報が出たことと、東京のスタジオが揺れていることを伝える。49分32秒からは最大震度が震度7であったことを伝え

る地震速報に変わる(画面②)。50分10秒からは緊急警報放送信号のピロピロ音が入り、津波警報が出たことを伝える(画面③)。50分30秒には「海岸や川の河口付近には絶対に近づかないでください」と初めて津波への注



意が出てくる。この後「海岸や川の河口付近には絶対に近づかないでください。また海岸付近の方は早く安全な高いところに避難してください」と初めて避難を呼びかける。それまでの1分半は大津波や津波の警報の中身を読み上げるのにかかった時間である。繰り返し何十回と避難を呼びかけることになるが、時間帯によるばらつきがあること、事態の変化にもかかわらず呼びかけの文言がずっと変化しないことなどが、後から見ると気になる。

たとえば「津波警報が出ているのは北海道太平洋沿岸中部、青森県太平洋沿岸、茨城県、千葉県九十九里・外房、伊豆諸島です。いずれも2mから1mの波が到達すると予想されています。もう一度大津波警報の出ている沿岸をお伝えします」「海岸や川の河口付近の方は早く安全な高台に避難してください」「津波がまもなく到達すると予想されていますので早く安全な高台に避難してください」「まもなく4分から5分ほどでこの到達予想時刻になりますけれども、あくまで目安ですので早めに、早めに高いところに避難してください」「6mの津波が押し寄せると予想されていますので早めに安全な高台に避難してください」「高い津波が押し寄せる恐れがありますので速やかに安全な高いところに避難してください」。

NHK ラジオセンターへの聞き取り調査では、「15時くらいの時点で、もっと避難の呼びかけができなかったかと思う。現地からの原稿が途絶えている状況下では、放送をしている側としても、何が起きているのかよくわからないままだった。この段階での基本的な情報は“避難の呼びかけ”であるはずなのに、津波到達の第一報が数10cm程度であったことで迷いが生じた(画面④)。避難を呼びかけるにしても、パニックを起こすきっかけとなってしまうので、あまり脅かすような放送はできない。今回もせいぜい『避難をしてください』といった言い方にとどまった。しかし、これでは『一刻も早く逃げてください!』といった気持ちが伝わったかどうか。『逃げる!』『危険です!』といったより切迫した言い方が必要だったかもしれない。放送を聞いた人が、行動のスイッチを素早く入れる放送とはどんなものか? これからも考えていかなければならない」という話だった。

3. 津波警報の続報 (15時14分)

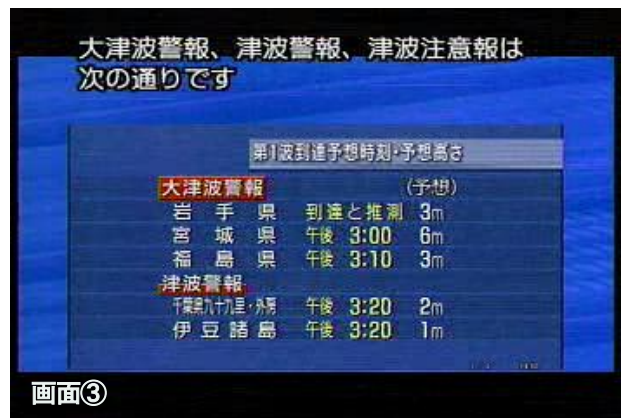
気象庁が15時14分に発表した最初の大津波警報の続報では、大津波警報の対象範囲を拡大したことを含め、警報・注意報の区分ごとに発表されている津波予報区がすべて放送で伝えられた。しかし実はこれだけではなく、予想される津波の高さを宮城県10m以上、岩手県と福島県6mと、それぞれ最初の警報発表の時と比べて2倍にかさ上げされていた。そのことが一度もアナウンスされずに終わっていたのである。津波の規模が尋常でないことを人々に知らせるには大切な情報であったはずなのに、どうしてこのようなことが起きてしまったのだろうか?

15時30分までは、NHKのラジオにはテレビの音声か

流れていた。テレビはどうしても目に入ってくるものに引っ張られてしまう。「岩手県の釜石市の現在の様子です。岸壁を乗り越えて海水が…」ではここで東京のスタジオからお伝えしていきます。東京のスタジオからお伝えし



画面②



画面③



画面④



画面⑤

ます。新たな情報です。大津波警報が追加されました」(画面⑤)。仙台局から釜石の映像をもとに報告中、東京のスタジオが割り込み、大津波警報の追加を伝えた。釜石の映像は初めて大津波が襲う光景をとらえたものだったので、大津波警報の追加の情報を伝えるのもそこそこに、再び映像の説明に移る。テレビ画面には岩手県6m、宮城県10m以上、福島県6mとあるのだが、アナウンスには一度も登場しなかった。アナウンスは文字テロップで示された「大津波警報が追加されました」だけを伝え、「テレビの映像は岩手県釜石市の現在の様子です。海水が溢れています。海水が溢れて陸上にあがってきています。これは市場の付近でしょうか。波が押し寄せています」と、東京のスタジオから伝えている(画面⑥)。そのころ、大きな余震で東京のスタジオは激しく揺れていた。大津波警報の追加と、大津波の直撃映像の生中継と、スタジオの大きな揺れと、三つの異常事態が同時進行していたのである。これが津波の予想高さに言及する機会を失わせた原因ではなかっただろうか？

それから後も各地に次々到達した津波のライブ映像や余震、観測情報、注意の呼びかけなどに追われ、結果的に今回のポイントであった大津波の予想高さ数字が変わった点へは、音声、文字テロップとも注意が払われていなかった。「釜石の現在の様子、大津波警報が出ている岩手県の釜石、海水が溢れています。海岸沿いの道路を車が走っています。非常に危険ですので早く安全な高台に移動してください」(画面⑦)。「テレビの映像は宮城県気仙沼の現在の様子です。大きな船が岸壁のあたりまで流されています。白い波と一緒に大きな船が流されています。船の前方には、港のさまざまな道具でしょうか、箱などが流されています。この波と一緒に大きな船が流されている様子が見えます。かなり波立っています。ところによっては大きくうねっています。白波が立っています。かなり揺れています」などと実況された(画面⑧⑨)。

つまり、気象庁が1回目の大津波警報の追加情報を発表した時、すでに釜石港に大津波が到達していることがロボットカメラの映像で明らかになっていたうえ、東京のスタジオも折から激しい地震の揺れに襲われていた。いずれも急いで伝えたい情報であり、結果として続報の中の津波の予想高さの見直しについては、テレビ画面に表示されてこそいたものの、ラジオでアナウンスされることは無く終わった。

地震発生からラジオ単独での放送体制に入るまで44分間。被災地が大停電となり、テレビはほとんど見ることができなかった状況を考えると、もっと早くできなかったかなという思いはあるようだ。津波の大きさが尋常ではないことを伝えようとした気象庁の意図は、混乱の中で被災地にはうまく届かなかったのである。

4. 津波警報の続々報 (15時30分)

15時30分、二度目の津波警報切り替えて、予想高さ

10m以上の範囲が大幅に拡大された(画面⑩)。「気象庁は新たに青森県の太平洋沿岸と茨城県の沿岸、それに千葉県九十九里浜と外房に大津波警報を出しました。大津波警報が出ている地域の皆さん、河口から離れてくだ



画面⑥



画面⑦



画面⑧



画面⑨

さい。高台に避難してください。海を見に行くのは危険です。どうぞ控えてください。テレビ画面左下には「第1波到達予想時刻・予想高さ」として「到達と確認 10m以上」と表示されているのだが、小さくて読み取れない(画面⑩)。ラジオのアナウンスでは「大津波警報です。大津波警報が出ています。岩手県の津波到達を確認しました。予想される高さは10m以上となっています。大津波警報で予想される津波の高さです。宮城県は津波到達を確認しています。予想される高さは10m以上です。福島県で津波到達を確認しています。予想される高さは10m以上となっています。また千葉県の九十九里・外房でこちらも津波到達を確認しています。予想される高さは10m以上です。また青森県の太平洋沿岸でも津波の到達を確認しました。予想される高さは8mです。引き続き、大津波警報が出ている地域です。茨城県もすでに到達と推測されています。予想される高さは10m以上です」。津波の第1波が到達したことが確認されたという観測情報と、予想高さが10m以上だという予測情報とが混在し混乱してくるが、地震発生から45分以上経過して、ようやく「10m以上」がオンエアされたのである。

その後、テレビはヘリコプターからの都心の駅前の混雑の様子、名取川河口付近から襲いかかる生々しい津波の映像を送り続けていた(画面⑫⑬)。テレビは映像と音声に加えて、画面に文字をダブって情報を付け加えるなどして、いま何が起きているかを伝えるのに適したメディアであるが、音声だけのラジオは同時に一つのことしか伝えることができない。膨大な情報に埋もれてしまわないよう、優先順位をつけて、大事なことから伝えるのが原則である。とくに津波の規模がただごとではなく、2日前からの前震、1年前のチリ地震津波、その他各地での大津波警報などがオーバーだったという刷り込みを覆せるような、強く避難を促す明確なメッセージが、早い段階から欲しかった。単に避難を呼びかけても避難をしようしない人たちが大半であることは以前から指摘されており、そのあたりの工夫も求められる。いろんな災害で警報の出し直しがうまくメディアに伝わらないと問題になるが、今回もそれが大きかったようだ。

5. まとめ

以上、発災から最初の1時間で放送がどのような情報を伝えたかについて、NHKラジオを中心に追跡した。

命を救う情報をもっと当事者に届くようにするためには、被災地にいる人々が、自分の命にかかわる大事な情報を聞き逃したり、気づかなかったりしないように、①大事な情報は優先的に繰り返し言葉で伝える、②分かりやすい表現で伝えることを原則に、気象庁とメディア、自治体などは、日頃から情報伝達の打ち合わせと訓練を積み重ね、非常事態に即応できるように備えること。そして、避難に関しては被災者に呼びかけが届いてもなかなか直ちには避難行動につながらない問題がかねてから

指摘されていたながら、東日本大震災でも同じ悲劇が繰り返されてしまった。この問題の解決のため、心理学的な側面からの対応策を含め、さらに検討の余地が残されている。今後の改善に期待したい。



画面⑩



画面⑪



画面⑫



画面⑬